

特別寄稿◎

バーミヤン遺跡の現場からの報告

前田耕作 特別研究員・和光大学名誉教授・アフガニスタン文化研究所所長

アフガニスタンの仏教遺跡バーミヤンは、この谷の文化的景観と比類のない考古遺跡群によって、2003年7月、世界遺産として登録された。遺産のカテゴリーは、世界遺産条約において設定されているカテゴリー「遺跡」(site)であり、同時に、条約履行のための作業指針の中で示されている登録基準 ii の「有機的に進化した景観」として評価されたのである。

バーミヤン遺跡と日本との関りは古く、そして長い。その歴史については『アフガニスタンの仏教遺跡バーミヤン』(2001年、晶文社)ですでに書いたが、タリバン政権によるバーミヤンの大仏爆破の前後から、私たちとバーミヤンの新しい関係の歴史が始まった。

タリバン政権の崩壊後、アフガニスタン復興のプログラムの不可欠で重要な項目として、文化復興がかかげられた。2002年1月の東京会議の後、5月、首都カーブルで「アフガニスタン文化遺産復興国際会議」が開催され、この会議の席上で日本政府は、バーミヤンの文化遺産の保存と修復に関してユネスコ(国連教育科学文化機関)に資金を拠出する意向を表明した。こうして、



写真1 大仏のある風景(1977年)

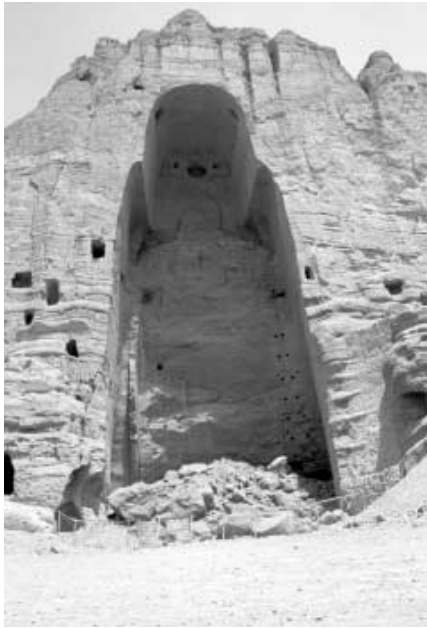


写真2 大仏不在の風景（2002年）



写真3 カーブル博物館に展示されたG洞発見の経片

バーミヤン遺跡の保存・修復の活動は、基本的にこの「ユネスコ文化遺産保存日本信託基金」によって行うことになったのである。9月、私は日本・ユネスコ合同ミッションの一員として、保存計画策定のため、現状調査すべく24年ぶりにバーミヤンを訪れた。

この時から今日まで、すでに5度バーミヤンを訪れ、保存・修復のための基礎作業を実施した。その間、幸運にも数々の新しい発見の機会に恵れた。そして今、改めて私は、バーミヤン遺跡が複層的な文化構造を有するなお新しい発見を待ちうける生ける遺跡であることを痛感している。

発見は過去の遺産を未来へと引き渡す。遺産は閉ざされた扉を開く者がいなければ、引き継がれ活用されない。以下の報告は、2003年夏から始った日本ミッションの《ドクメンタ・バーミヤーナ》の序章である。

カーブル博物館にはかつてガラス板に挟まれた9葉の経典の断片が展示されていた。バーミヤンの仏教遺跡から発掘によって出土したものである。書体を異にしたサンスクリット語の写本の破片である。カーブル博物館が破壊されたのち、これらの経片の行方は知られていない。

1930年6月、フランス考古学調

査隊（ジャン・カール）はパーミヤンで、落下した岩石の下に埋没していた1つの石窟の発掘を試みた。のちにG洞と名づけられる4メートル四方の小さな石窟であったが、パーミヤンの他の諸洞とは違って壁画や塑像を多く残したきわめて重要な洞であった。洞のまん中に方形基壇の仏塔を置き、入口をつくる南面を除く、東西北の3面の壁の中央に塑像の坐仏を配し、天井はスキンチアーチの上に円蓋をのせた仏堂であった。そして円蓋にはブルーに塗られた地の上に、塑像と壁画が残されていた。しかし壁画は土を取り除かれ、外気に触れるとたちまち色彩が失われていった。今日ではフランス隊によって描かれた復元模写しか残されていない。この発掘のとき、仏塔と仏堂の北壁との間から出土したのが「大量の経典写本」であった。

発掘をしたフランス隊の隊長ジョゼフ・アッカン（『パーミヤンの新しい考古調査』1933年、パリ）の中でつぎのようにしている。

「仏塔の基壇の縁の部分の土を取り除いていたとき、大量の塑像の断片が姿を現わした。また仏塔の北面部と仏堂の側壁との間から、とりわけ雨水の浸透が認められた場所からかなりの数のかたまった写本が見つかった。」アッカンはさらにその後の処理についてもふれている。「われわれはこれらの塊りのうちもっとも保存状態のよい数葉の経片をガラス板にはめ込むことに成功した。それらはかなり大きなもので縦10センチ、横25センチほどあった。アフガニスタン国王（当時）ナーディル・シャー陛下の承認をえて、これらの経片はパリに送られた」と。

謎が残る。カーブル博物館に展示されていた経片（写真3）が、このとき



写真4 G洞址 1930年にフランス隊が発掘

発見された経片の一部であることは間違いないが、アッカンのいうパリに送られたものと同一のものかどうか、そしてなにより「かなりの数の写本」はいったい今どこにあるのか、いずれ突きとめられなければならないだろう。

パーミヤンのG洞で出土したこれらの経片は、やがて当時フランス・アジア協会の会長であったシルヴァン・レヴィ（1926年から28年まで日仏会館の館長でもあった）によって調査研究された。経片に使用されている文字の大部分はブラーフミー（梵字）であったが、ごく稀にカロシュティー文字（セム系のアラム文字から派生し、ブラーフミーの影響を受け、ガンダーラ地方で完成した文字）のものも混っていた。

シルヴァン・レヴィはつぎのように書いている。「経片にみられる文字の種類は、3、4世紀（クシャーナ・ブラーフミー）から7、8世紀（グプタ・ブラーフミーの後期の文字）に渉るものである。インド固有の文字に加えて、中央アジアに流布した書体、ホータン型とクチャ型の文字もあった。おそらく洞中にあった経典は、さまざまな地方から集められた写本であるか、さまざまな国よりやって来た写経者の手になるものであったと考えられる。これらの経片で7、8世を下るものはなかった。また経片の大部分は教理（シャーストラ）と論書（アビダルマ）に属するものであるが、正確にどの経のもの、どの論のもの、と特定することは難しい。」しかし、その中には大衆部（マハーサーンギカ）の律（^{りつ}ヴィナヤ）に属する断片とはっきりと特定できるものもあったのである。

630年、玄奘三蔵がパーミヤンを訪れたとき、ここには「伽藍が数十ヶ所あり、僧は数千人で、小乗の説出世部を学習している」と『大唐西域記』にしている。そして、ここにはまた「摩訶僧祇部（大衆部）の学僧」がいたと『大唐大慈恩寺三蔵法師傳』にしている。

パーミヤンから出土した経片と玄奘の記録とがわずかながら交錯したのである。パーミヤンで花開いた仏教の内実を知りうるためには、もっと主題がはっきりと特定できる連続する経片の出現がもたれてきたのである。とはいえ、G洞からの経片の出土は、パーミヤンにおける経典発見の可能性を十分に裏づけるものであった。

パーミヤン仏教遺跡の再調査は1960年代の初めから、1979年の旧ソ連軍のアフガニスタン侵攻まで、壁画と石窟構造を中心にしておこなわれた。1968年からはユネスコによるパーミヤンの東西2大仏とその周辺窟の保存修復の事業が10年に涉っておこなわれた。しかし、石窟内外の発掘はおこなわれず、また新たな経典類の発見もなかった。

1980年からの激動するアフガニスタンの政治的情況によっていっさいの学術的活動は停止した。1990年代、内戦の激化とともに文化財の流出が目立つようになった。「アフガニスタン文化財保護委員会」(通称スパチ)がナンシー・デュプリーの提唱によって設置されたのも内戦のさなかであったが、それはアフガニスタンからの文化財の流出が顕在化したからである。

パーミヤンから盗掘された経典類の海外流出が噂にのぼったのは1995年以降のことであった。その噂が事実として姿を現したのは意外なところからであった。日本とノルウェーに「パーミヤン出土」といわれる大量の経片があるというのである。日本へ流出したものは「平山郁夫画伯と富山県の林寺蔵州師によって入手された」という。もう一方の1万点以上にものぼる大量の写本断簡類はノルウェーの実業家マーティン・スコイエン氏の手へ渡り、仏教大学の松田和信氏たちによって研究され、経片の「ローマ字転写、それに基づく復元テキスト、対応する漢訳あるいはチベット語訳の資料、英訳とカラー複写」等を収めた『スコイエン・コレクションの仏教写本』第1巻、第2巻がすでに公刊されている(第1巻2000年、第2巻2002年)。本書第1巻の序文を書いたオスロ大学のイェンツ・ブロールヴィック氏の言葉と松田和信氏が『仏教大学総合研究所報』第19号に書かれた写本の出土にかかわる情報をつなぎ合わせると、出土情況はおよそつぎのようになる。

タリバンに追われてパーミヤン近隣の石窟に難民として住みついた人びとによってこの大量の写本は発見されたのだという。その場所は「2体の大仏で有名なパーミヤン溪谷北部の洞窟の中」であるという。その洞窟には入り口が1つあり、「内部が数室に分れた洞窟で、そのうちの1室の奥まったところに仏像が安置され、周囲に写本が散乱していた」のだという。「タリバンの手から写本を救出しようとした現地の人びとは、ヒンドウクシュを越え、ハイバル峠の北方へと運び出す途中、タリバンに追われ、写本はこのときいっそう破損を蒙った」というのである。

発見から救出に至るプロセスは明らかに後からつくられた物語だろう。盗掘品に「文化財難民」としての市民権を与えるため、狡猾なバイヤーたちによって捏造された物語であると私はにらんでいる。ただ、この情報の中にもいくつか事実をうかがわせるものがある。1つは、1990年代には多くの難民がパーミヤンの石窟を住居にしていたことである。そしてこんにちでもその状態は改善されておらず、私たちが2003年7月より開始した遺跡の保存作業にも支障をきたしたことがある。ここで「パーミヤン溪谷北部の洞窟」とは明らかに谷の北方に位置する現在のパーミヤン遺跡そのものを指すのであ



写真5 掘り起こされた床面



写真6 随説諸法経の一部(スコイエン・コレクション)

て、さらにその奥とっているのではない。バーミヤン遺跡の東西には生活窟はあるが、その奥には石窟の存在はほとんど認められないからである。

また「入り口がひとつで内部が数室に分かれた洞窟」というのは、バーミヤン石窟の構造の1つの特性を表わしている。機能を異にする数洞で1つの伽藍を形成しているバーミヤン石窟の特徴をよく表現しているからである。しかし、「仏像が安置され、周囲に写本が散乱していた」というのは嘘である。仏像が安置されていた場所はどの洞にもあるが、それらの諸洞で調査のおよんでいないところはまずないといってよい。しかも写本が散乱していたので

あれば、かならず調査の折に収集されているからである。

2002年10月、大仏爆破ののち、タリバン政権崩壊のあと、日本・ユネスコ合同調査隊の一員としてバーミヤン遺跡の現状調査をした私たちは、坐仏を安置した仏堂を中心としたいくつかの堂の床がごとごとく掘り返されていたのを目にした(写真5)。おそらくバーミヤンの仏教時代の終末時に床下に埋蔵されたかもしれない経典の探索、盗掘がおこなわれたのであろう。写本の救済というのは盗掘の動機をかくすため難民にかこつけての口実に過ぎない、というのが私の憶測である。



写真7 石窟内の清掃作業



写真8 石窟内の清掃作業

スコイエン・コレクションに加えられたアフガニスタン出土の仏教写本のうち、バーミヤン出土と伝えられる断簡のすべてがバーミヤンのものだと断定しがたいが、いずれにせよ、写本の用紙には貝葉(椰子の葉) 樺皮(白樺の樹皮) 動物の皮が使われ、使用文字もカロシュティー文字、クシャーナ文字、グプタ文字、ギルギット・バーミヤン第1型文字、同第2型文字の5種が確認されているという。そして文字より判断される年代は2世紀から7世紀に涉るといふ。シルヴァン・レヴィのG洞出土の写本の観察(『アジア学報』1932年)とほぼ同じである。

松田和信氏によれば、「コレクションの中で最も新しい写本は、7世紀頃のギルギット・バーミヤン第1型、および同第2型文字(わが国に伝えられた悉曇^{しつたん}文字の原型)による写本である。その中には第1型文字による『摩訶僧祇律』の樺皮写本断簡、さらに同じ書体による散文で因縁物語のついた『法句経』の断簡、さらに『法華経』、『金剛般若経』、『薬師経』、『月上女経』、『宝星陀羅尼経』、『仏名経』、『月燈三昧経』なども認められた」(『仏教大学総合研究所報』19号)という。もしこれらの写本がバーミヤン出土のものと確定できれば、私たちはバーミヤン仏教の内奥にいま一步踏みこむ手掛りをえたことになるだろう。



写真9 最上部に見える窟が仏典の発見されたF窟

2003年7月、私たちは2002年10月の現状調査の結果に基づき、石窟の緊急を要する保存のプログラムを実行に移した。それはまず第1に、内戦中と戦後の2つの時期にバーミヤンでなされた破壊と略奪によってすべてが失われようとしている壁画の保護と、人びとのその後の出入りによって床上に散乱して踏み潰されるままになっている壁片を収集することであった。イタリア隊によって補強修復が予定されている東大仏の大仏龕の東側壁の作業が始まるまえに、東大仏の周辺窟の壁画片の収集と洞内のクリーニングを終えておか



写真10 仏典が発見されたM洞
梯子を使っでの作業



写真11 M洞内の天井に残る壁画



写真12 仏典の断片が発見されたJ洞群

ねばならなかった。私たちはパーミヤンの石窟群を有する3つの摩崖、38メートルの東大仏を中心に刻む東方崖、パーミヤンにおける唯一の未調査石窟群（L洞群）とK洞の名で知られる石窟のある中央崖、55メートルの大仏を西端に刻む西方崖のうち、東方崖の諸窟に絞って作業をおこなった。

壁片の収集を終え、窟内のクリーニングをしているとき、F洞とM洞で思いもかけず経片を拾い出した。バーミヤンにおいて学術的調査の過程で経片が発見されたのは1930年のアッカシラによるG洞での発見以来73年ぶりのことである。しかも経片の発見された諸洞はいずれも東大仏の東方にあり、互いに近接していることが注目される。

FとGはフランス考古学隊によって付された記号だが、Mは1969年の名古屋大学の調査によって発見され付された記号である。GとMは石窟の構造は異なっているが独立洞であり、Fは3室よりなる集合洞である。共通してい



写真13 土中に見える仏典の断片（東京文化財研究所提供）



写真14 経片（同上）

るところは3洞とも壁画を残していることである。

今回F洞とM洞で発見された経片の文字は、松田和信氏の意見ではいずれもギルギット・パーミヤン第1型文字で7世紀のものであるという。存在する経片の文字だけから判断するとすれば、F洞とM洞はG洞とほぼ同じ時代、7～8世紀を下限とする仏窟であったと思われる。F、M、Gのいずれの洞にも涅槃図が描かれていることも注目される。

残された壁画がこの年代を裏づけることができるか、またこれから予定されている壁片の顔料、壁画の地をつくっている土の中に混入しているスサ(麦藁)や動物の毛や^{そま}籐などの分析の結果と照合するかどうか、パーミヤン遺跡の新しい研究の扉がいま開かれようとしている。また今回の発見で、壁画を残していない数多くの石窟でも窟内のクリーニングによって経片が見つかる可能性が大いにあることが判った。保存作業の進展とともに多岐に渉る新たな課題も浮び上がってくるのである。こうした点からも、パーミヤン遺跡はなお問題を生み出しつづけ、新しい意味を問いつづけ、さらなる調査・研究を求める生ける文化遺産ということになろう。東西両大仏の建立年代とその図像学的主題についても改めて問い直される時期がこよう。今回の小さな経片の発見の意味はこれほどまでに大きいといえる。「細部にこそ神は宿り給う」(ヴァールブルグの言葉)である。

そしていずれ、スコイエン・コレクションの出所も私たちの手ではっきり突きとめることができる日が来よう。

補記

2004年12月10日、名古屋大学年代測定総合研究センターは、パーミヤン壁画の炭素14年代測定結果を発表した。それによるとF洞は7世紀から8世紀、M洞はそれよりも古く5世紀から6世紀の洞と測定された。